

北九州市立大学文学部紀要

(人間関係学科)

第 21 卷

目 次

田島 司

交差カテゴリーを用いた実験状況における内集団への同一視と集団間行動
..... 27

北九州市立大学文学部

2014年3月発行

交差カテゴリーを用いた実験状況における内集団への 同一視と集団間行動¹

田 島 司

In-group identification and intergroup allocation in the crossed categorization paradigm

Tsukasa Tajima

要 旨

最小条件集団パラダイムで生じる内集団びいきを促進する要因を検討した先行研究において、内集団の肯定性を求める傾向の強い個人が内集団びいきを起こしやすいことが明らかにされていることから、日常での社会的アイデンティティの十分な形成が実験状況における内集団びいきを低減するかを検討した。現実社会の状況に類似させるために交差カテゴリーを用いた実験状況を操作し、相対的に重要度の低いはずの内集団に対する評価と、集団間での報酬分配課題を行った。その結果、日常での社会的アイデンティティと実験状況における内集団への評価や内集団びいきとの関連はみられず、むしろ内集団への同一視の程度とは正の関係が見出された。社会的アイデンティティが機能する状況の範囲を考慮した実験方法を工夫する必要性について考察された。

キーワード： 交差カテゴリー、内集団びいき、最小条件集団パラダイム、社会的アイデンティティ

問 題

家族や親類などの親しい他者に有利な処遇をすることを一般に身内びいきといい、同様の現象は、サイズにかかわらずさまざまな集団間で起こりうる。Tajfel, Billig, Bundy, & Flament (1971)は、このような現象が生じるための最低限の条件を検討するために、初対面の実験参加者たちを2つの集団に区分できるささいな基準を示した後、成員間で報酬分配させるという最小条件集団パラダイム (minimal group paradigm) とよばれる手法で実験を行った。その結果、単に2つの集団に区分するという実験操作だけで、自己が属する集団の成員を優遇する内集団びいき (ingroup favoritism) が生じた。その後の研究では、くじ引きやコイントスのように完全な無作為による基準も集団の区分に用いられ、従属変数として成員の特性や生産物を評価させるものもあるが、いずれの実験においても、客観的な差が無いにもかかわらず内集団が外集団よりも肯定的に評価された。このような内集団びいきの機制について社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) では、外集団よりも肯定的な内

¹ この論文で紹介されているデータは、2013年に北九州市立大学文学部人間関係学科に提出された山本佳奈さんの卒業論文のデータを筆者が再分析したものである。

集団を基盤とした社会的アイデンティティによって自尊心を維持、高揚させようとするために生じると解釈されている。

最小条件集団パラダイムで生じる内集団びいきの興味深い点は、客観的に見れば不公正な処遇や不正確な評価が、客観的に見れば無意味なはずの基準で区分された、まさに“最小”の集団で生じるところである。

その後、どのような要因が最小条件集団パラダイムにおける内集団びいきの程度を規定するかが多くの研究によって検討されている。例えば、社会的アイデンティティの形成は主観的な不確実性を低減すると仮定し (Grieve & Hogg, 1999; Hogg, 2000; Hogg, Sherman, Dierselhuus, Maitner, & Moffitt, 2007)、実験操作によって不確実感を高めた場合に、内集団びいきが促進されることが確認されている。つまり、社会の中で自己が何をすべきか、という主観的な不確実性を低減させるために、内集団びいきを実行することを通して、社会的アイデンティティにもとづいて自己と社会の関わりを理解したということである。これと同様に、見知らぬ実験参加者同士で内集団が構成される不慣れた条件において強い内集団びいきが生じるという実験結果 (Tajfel & Billig, 1974) も、高い不確実感を低減させるためであったと解釈されている (Grieve & Hogg, 1999)。また、社会的アイデンティティの基盤となる肯定的な内集団を求める傾向の強い個人ほど、最小条件集団パラダイムにおいて内集団びいきを起こしやすいことが明らかになっている。例えば、内集団が外集団より肯定的で優勢であるとみなそうとする社会的支配志向 (social dominance orientation) の程度が高い個人は、最小条件集団パラダイムでの集団区分に同意した場合に内集団びいきの程度が高く (Sidanius, Pratto, & Mitchell, 1994)、また、内集団を好意的に評価し外集団を劣等であると知覚する傾向のある自民族中心主義 (ethnocentrism) の程度が高いことは、内集団への同一視を高め、そのことが内集団びいきを高めることにつながっていた (Perreault & Bourhis, 1999)。さらに、自己の肯定性に対して確信が持てず肯定的な自己を得ようとする防衛的高自尊心 (defensive high self-esteem) を持つ個人が、強い内集団びいきを起こすことも明らかになっている (Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003; 原島・小口, 2007)。

以上のように、社会的アイデンティティに伴う主観的確定感や内集団の肯定性を求めるよう動機づけられている個人が内集団びいきを起こしやすいことは納得できる結果である。このことを逆に考えれば、社会的アイデンティティが十分に形成されている個人は内集団びいきを起こしにくいのであろうか。内集団びいきが現実社会における偏見や差別、集団間葛藤の基本的原理であると考えられるならば、これを抑制する個人内要因を特定することは重要な問題である。しかしながら、個人内で先行する社会的アイデンティティによって内集団びいきが抑制される効果が明らかにされているとは言いがたく、むしろ、社会的アイデンティティの形成に伴うと考えられる特徴を持った個人は内集団びいきを起こしやすいように解釈できる以下のような研究もある。

例えば、柿本 (1995) は、濱口 (1982) の提起した“間人 (かんじん)”モデルに着目し、このモデルが“集団成員性を含む他主体との関係性の組み込まれたものとして人を概念化しているのは確か (p.96)”であるとして、“間人”モデルに当てはまる度合いの個人差と内集団びいきの程度との関連を

検討した。その結果、自己概念の中に集団成員性が組み込まれていると想定されていた“間人”モデルに当てはまる度合いの強い個人ほど、強い内集団びいきを起こしていた。また、高田・中村・濱野・山邊（2001）は文化的自己観の観点をつまえて、相互協調的自己観を持つ個人が自己を社会的アイデンティティの側面からとらえる傾向が強いと考え、内集団びいきの程度との関連を検討した。その結果、一般的な最小条件集団パラダイムで用いられる実験状況と同様の評価懸念の無い条件において、相互協調的自己観を持つ個人ほど内集団を肯定的に評価する傾向があった。さらに、Crocker & Luhtane (1990) の実験では、諸集団に対する集合的自尊心の程度は内集団びいきの程度に影響を与えておらず、内集団への脅威が存在する場合に限ると、集合的自尊心の高い者の方が強く内集団びいきを起こしていた。加えて、Long & Spears (1998) の実験でも集合的自尊心は内集団びいきに対して正と負のいずれの効果も持っていなかったが、個人的自尊心は内集団びいきに正の効果を持っていた。これらの実験では社会的アイデンティティそのものを測定しているわけではないが、社会的アイデンティティの形成に伴うと考えられている特徴を持った個人ほど、内集団びいきがむしろ促進される場合もあることがわかる。

これらの結果を理解するためには、社会的アイデンティティという概念のとらえ方と最小条件集団パラダイムという状況の特殊性との関連を整理する必要があるように思われる。まず、広義の社会的アイデンティティとは“集団成員性に基づいた自己概念の側面 (Turner, 1999, p.8)”であるといえ、このようにとらえると、社会的アイデンティティを十分に形成する個人は集団成員性を自己概念へと取り込みやすく、内集団びいきを起こしやすいことが推察される。柿本（1995）や高田ら（2001）の結果はこの考えにそって解釈することができる。一方で、Long & Spears (1998) の実験で、現実社会での内集団成員性に対する他者からの評価に基づいた“公的な集合的自尊心”の高い個人は、内集団びいきを起こさなかったことから示唆されるように（松田・稲本・小林・宮西・本好・福井, 2012）、公的な側面に限った社会的アイデンティティが内集団びいきと負の関係にある可能性がある。つまり、公的に合意が得られる客観的な集団成員性に基づいた社会的アイデンティティを持つ個人は、現実社会に存在する無数の集団成員性の中からそのような客観性のある集団成員性をあえて選択しているのであり、実験状況においても客観性のある基準で区分される集団を優先して同一視の対象に選択するため、無意味な基準で区分される集団を同一視の対象とする傾向が弱いと考えられる。しかしながら通常の最小条件集団パラダイムにおいては、実験参加者に付与される集団区分の基準が1つに限定されているため、無意味な基準で区分された集団しか同一視の対象が無く、前述した、集団成員性を自己概念に取り込みやすい影響がそこに混在するので、実験結果の理解を困難にしているように思われる。

そこで本研究では、最小条件集団パラダイムを用いつつも、客観的な重要性の異なる複数の集団区分基準を組み合わせた交差カテゴリーによって現実社会により近い実験状況を用い、個人内に先行する公的に合意可能な社会的アイデンティティの形成が内集団への評価や内集団びいきの程度に影響を与えるか検討する。

これまでにも、客観的な重要性の異なる複数の集団区分基準を交差させることが内集団びいきに与え

る影響が検討されてきた (Brewer, Ho, Lee, & Miller, 1987; Hewstone, Islam, & Judd, 1993)。その結果、集団区分の種類によって内集団びいきの程度に差が生じ、複数の集団区分の基準に対して個人内で相対的な優先性があることが明らかになっている。今回の仮説に従えば、このような集団区分基準間の優先性には個人差が存在し、現実社会において公的に合意可能な社会的アイデンティティを持つ個人は、実験状況においても、客観的に無意味な基準で区分された内集団への肯定的な評価や内集団びいきを生起させる傾向が弱いということが予測される。

方 法

実験参加者は大学生65名である。実験は講義を利用して行われた。

まず、実験参加者の日常生活においてどのような社会的アイデンティティを形成しているかを20答法によって測定した。20答法は古沢・星野 (1962) の論文を参考にして「私は誰だろうか」という問いに対する 20 通りの回答を記入させる方法を用いた。また、記入したそれぞれの項目に対する重要度を7件法 (1 : 重要度が低い ~ 7 : 重要度が高い) で測定した。記入時間は約 15 分間である。回答を開始する前に、20個の回答欄すべてを埋めなくても良いことや、時間よりも早くに回答が終わっても合図があるまでは次のページを開かないことなどの注意事項を説明した。

その後、一般的な最小条件集団パラダイムを用いた内集団評価と集団間行動を測定する手続きを行った。実験参加者全員に対して、これから小集団ごとに絵本を作成する課題に参加してもらうことを依頼し、その際の作業をするために、作画担当グループと文章担当グループのいずれかに割り当てられてることと、それと同時に、作業をするための担当とは無関係であるが、XグループとYグループとに無作為に分割することを教示した。さらに、これら2種類の区分基準は交差しており、つまり、作画担当グループのXグループ、作画担当グループのYグループ、文章担当グループのXグループ、文章担当グループのYグループという4種のいずれかに各自が所属することになることを説明した。その後に配布する用紙に各自が属することになったグループが記載されているが、実際には全員が文章担当グループのXグループに所属した。

次に、Xグループという内集団成員のイメージについて評価を行った。評価の方法は赤須・木藤 (2011) の実験を参考にして、内集団の成員 (自己以外) について9つの正負の価値判断を含む形容

Table 1 集団間評価に用いた9種の形容詞対

感じの悪い	—	感じの良い
にくらしい	—	かわいらしい
不親切な	—	親切な
無気力な	—	意欲的な
積極的な	—	消極的な
自信のない	—	自信のある
堂々とした	—	卑屈な
軽率な	—	慎重な
重厚な	—	軽薄な

詞対 (Table 1) に7件法 (-3 : 全くあてはまらない ~ +3 : 非常にあてはまる) で回答させた。また、内集団への同一視の程度をPerreault & Bourhis (1999) で用いられている項目 (「…グループの一員としての実感はどの程度ありますか」) を用いて、7件法 (1 : 全くない ~ 7 : 非常にある) で回答させた。

最後に、グループ間での報酬分配課題を行うことによって集団間行動を測定した。実験参加者には、XグループとYグループとで得点を分配し合い、最終的に各グループに分配された得点数によって報酬量が決まると教示した。配布された用紙には、内集団 (自己以外) と外集団に対して分配できる得点の組み合わせが記載されたマトリックスがあり、そこから1つの組み合わせを選択させる仕組みである。マトリックスは7種あり、いずれも内集団と外集団とに得点分配するが、数字の組み合わせだけが異なっている (Figure 1)。

最後に、実験のディブリーフィングを行った。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14

25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1
7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19

25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7

※それぞれのマトリックスには左端にグループ名が上下に記載されている。数字の組み合わせを1つ選ぶと、それぞれのグループに何ポイントが分配されるかが決まる。

Figure 1 報酬分配マトリックス

結 果

実験参加者65名のうち、内集団への同一視の程度に関して11名の未回答者がいたので、これに関わる分析のみ54名分のデータを用いている。

まず、20答法の回答内容を分析した。各実験参加者の回答数の平均は12.6項目 ($SD=5.72$) であった。回答内容はKuhn & McPartland (1954) の研究を参考にして「合意 (consensual) 可能な記述」と「その他」の2つに分類した。「合意可能な記述」の基準は、性別や学校名、出身地などのような、集団や役割に結びつき、所属や関連が客観的に証明できるか否かである。それ以外の記述は「その他」に分類した。全体の回答の内、「合意可能な記述」は285項目、「その他」が526項目であった。回答の中に1つでも「合意可能な記述」があるか否かによって実験参加者を分類したところ、合意可能な記述あり群が55名、合意可能な記述なし群が10名であった。

次に、内集団評価に用いた9種の形容詞対の回答について、cronbachの α 係数を算出したところ.74であった。これらの項目が内的整合性を持っていると考えられるため、これらの平均値が内集団成員に対する肯定的なイメージの程度をあらわしているとしてこれを内集団評価得点とした。内集団評価得点が内集団に対して肯定的な評価となっているかを検討するために、この得点の平均点が0、すなわち内集団に対して肯定的でも否定的でもない評価を与えた場合とを比較するone sample t-testを行った。その結果、有意な差があり ($t(63)=3.11, p<.01; M=3.14, SD=5.74$)、全体として内集団に肯定的な評価を与えていた。

さらに、内集団評価得点を従属変数として、合意可能な記述あり群と合意可能な記述なし群との差を検討するためにt検定を行った。その結果、有意差はみられなかった ($t(63)=0.55, ns$; 合意可能な記述あり群: $M=0.35, SD=0.67$; 合意可能な記述なし群: $M=0.48, SD=0.87$)。合意可能な記述項目の有無と内集団への評価とは関連がなかったといえる。内集団評価得点と、合意可能な記述に対する重要度の平均値と最大値との間の相関係数を算出したところ、いずれの変数間にも有意な相関関係はみられなかった (内集団評価得点と合意可能な記述の重要度の平均値との間: $r(63)=-.09, ns$; 内集団評価得点と合意可能な記述の重要度の最大値との間: $r(63)=-.05, ns$)。

また、集団間での報酬分配課題において、7種のマトリックスで内集団に分配したすべての得点と外集団に分配したすべての得点を用いて、集団間で報酬に差をつけて分配しているかを検討するためにt検定を行った。その結果、有意な差があり ($t(64)=4.63, p<.01$; 内集団への分配: $M=92.43, SD=8.76$; 外集団への分配: $M=84.20, SD=10.24$)、全体として内集団に多くの報酬を分配する内集団びいきが生じていた。また、内集団成員に分配したすべての得点から外集団成員に分配したすべての得点を引いたものを「内集団びいき得点」として算出した結果、その得点が正の値であったものは65名中49名であり ($p<.01$)、内集団びいきをしている者が多かった。

続いて、内集団びいき得点を従属変数として、合意可能な記述あり群と合意可能な記述なし群との差を検討するためにt検定を行った。その結果、有意差はみられなかった ($t(63)=1.66, ns$; 合意可能な記述あり群: $M=9.47, SD=13.38$; 合意可能な記述なし群: $M=1.40, SD=18.03$)。内集団びいき得点と、合意可能な記述に対する重要度の平均値と最大値との間の相関係数を算出したところ、いずれの変数

間にも有意な相関関係はみられなかった（内集団びいき得点と合意可能な記述の重要度の平均値との間： $r(63)=.12, ns$; 内集団びいき得点と合意可能な記述の重要度の最大値との間： $r(63)=.10, ns$ ）

内集団への同一視の程度に関しては回答者数が少なく、これを従属変数として合意可能な記述有無の群間を比較するをする検定ができなかったため、内集団への同一視の程度と、合意可能な記述に対する重要度の平均値と最大値との間の相関係数のみを算出した。その結果、内集団への同一視の程度は合意可能な記述の重要度の平均値との間（ $r(52)=.31, p<.05$ ）と、最大値（ $r(52)=.29, p<.05$ ）との間にそれぞれ有意な正の相関関係がみられた。

考 察

内集団評価得点と報酬分配課題の結果を分析したところ、内集団への肯定的な評価や内集団びいきが生じていたところから、実験状況における客観的な重要性が相対的に低いはずの基準で区分された集団に対しても、これを軽視するのではなく内集団として認知していることが明らかとなった。これについては多くの先行研究の結果と同様である。そして本研究では、客観的な重要性の異なる複数の集団区分基準が存在する実験状況において、個人内に先行する公的に合意可能な社会的アイデンティティの形成が、最小条件集団パラダイムにおける内集団への同一視および内集団びいきの程度に影響を与えるか検討したが、結果は予測とは異なっていた。合意可能な記述で測定された社会的アイデンティティの形成は、内集団評価得点と内集団びいき得点とに関連がなく、内集団への同一視の程度に関しては、むしろ合意可能な記述への重要性と正の相関関係にあった。

合意可能な記述をした者とは、すなわち、公的に合意が得られる客観的な集団成員性に基づいた社会的アイデンティティを持つ者であるが、このような実験参加者は特に、実験状況においても新規の集団成員性を自己概念へと取り込みやすいという点で、柿本（1995）や高田ら（2001）の結果に通じるものである。

このような結果となった理由として考えられることは、ひとつは実験方法の問題である。今回の実験の特徴は、客観的な重要性の異なる交差カテゴリーを操作した点であるが、相対的に重要性の高い集団区分であったはずの作画担当グループと文章担当グループについては、その存在を教示していたものの実際に集団での作業等をさせておらず、リアリティはそれほど高くなかったと考えられる。そのために、内集団評価や集団間行動に用いられた相対的に重要性の低い集団区分だけが顕在化し、結果的には通常の最小条件集団パラダイムと変わりなくなってしまったという可能性である。対面させてしまうことの欠点を取り除くような何らかの工夫をしたうえで、相対的に重要性の高い集団区分の存在をより強く実感させる必要があるかもしれない。また、集団の存在を実感させるだけでなく、内集団評価や集団間行動の測定についても、相対的に重要性の高い集団区分で先に実施し、その後重要性の低い集団区分でも行うことで、相対的な重要性の違いが一層強調されることも考えられるだろう。

さらに、公的に合意可能な社会的アイデンティティを形成している個人が新たに同一視したり内集団びいきしたりする動機が弱いという今回の仮説がもし妥当であるとしても、日常生活において先行

して形成している社会的アイデンティティが通用する社会的範囲内に限るかもしれないということである。そのような個人は、実験室での実験環境のように、社会的に日常と離れた新規の場所ではむしろ促進的に内集団に同一視し、活発な集団間行動する傾向だけが機能してしまうが、既存の社会的アイデンティティの合意可能性が通用する社会的範囲内であれば、相対的に無意味な集団区分基準で成立する内集団には同一視が弱く、内集団びいきをする動機も弱くなると考えることもできるだろう。

引用文献

- 赤須大典・木藤恒夫 (2011). 集団表象と自己表象の一致性と集団同一視との関係 久留米大学心理学研究 **10**, 31-38.
- Brewer, M. B., Ho, H., Lee, J., & Miller, N. (1987). Social identity and social distance among Hong Kong school children. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **13**, 156-165.
- Crocker, J. & Luhtanen, R. (1990). Collective self-esteem and ingroup bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 60-67.
- 古沢厚子・星野命 (1962). 自己記述にあらわれた自己態度の安定性 国際基督教大学学報 **9**, 97-124.
- Grieve, P. G. & Hogg M.A. (1999). Subjective Uncertainty and Intergroup Discrimination in the Minimal Group Situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 926-940.
- 濱口恵俊 (1982). 日本人の人間モデルと「間柄」 大阪大学人間科学部紀要 **8**, 207-240.
- 原島 雅之・小口 孝司 (2007). 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究 **47**, 69-77.
- Hewstone, M., Islam, M. R., & Judd, C. M. (1993). Models of crossed categorization and intergroup relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 779-793.
- Hogg, M. A. (2000). Subjective uncertainty reduction through self-categorization: A motivational theory of social identity processes. *European Review of Social Psychology*, **11**, 223-255.
- Hogg, M. A., Sherman, D.K., Dierselhuis, J., Maitner, A.T., & Moffitt, G. (2007). Uncertainty, entitativity, and group identification. *Journal of Experimental Social Psychology*, **43**, 135-142.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
- 柿本敏克 (1995). 内集団バイアスに影響を及ぼす個人差要因 社会心理学研究, **11**, 94-104.
- Kuhn, M.L. & McPartland, T.S. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**, 68-76.
- Long, K. M., & Spears, R. (1998). Opposing effects of personal and collective self-esteem on interpersonal and intergroup comparisons. *European Journal of Social Psychology*, **28**, 913-930.
- 松田信樹・稲本和子・小林未紀・宮西智子・元好理恵・福井斉 (2012). 集合的自尊感情研究の概要 大阪大学教育学年報 **7**, 61-70.
- Perreault, S., & Bourhis, R. Y. (1999). Ethnocentrism, social identification, and discrimination. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 92-103.
- Sidanius, J., Pratto, F., & Mitchell, M. (1994). In-group identification, social dominance orientation, and differential intergroup social allocation. *The Journal of Social Psychology*, **134**, 151-167.
- Tajfel, H. & Billig, M. (1974). Familiarity and categorization in intergroup behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, **10**, 64-83.

Psychology, **10**, 159-170.

Tajfel, H., & Turner, J.C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W.Austin, & S.Worchel (Eds.), *The Social Psychology of Intergroup Relations*. Calif.: Brooks/ Cole.

Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. L. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.

高田 利武・中村 美智子・濱野 千恵美・山邊 瑞枝 (2001). 相互協調的自己観と内集団バイアス：最小条件集団パ
ラダイムにおける状況要因と個人要因の効果 奈良大学紀要 **29**, 117- 127.

Turner, J.C. (1999). Some current issues in research on social identity and self-categorization theories. In N.Ellemers, R.Spears, & B. Doosjse (Eds.), *Social Identity*. Oxford, England: Blackwell.

JOURNAL OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
(HUMAN RELATIONS)

Vol. 21

CONTENTS

Tsukasa Tajima

In-group identification and intergroup allocation in the crossed
categorization paradigm 27

Published
by The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
Kitakyushu, Japan
March 2014